の頭の名。当り浄るりにしたがひ。しやう〳〵は申せし也。」と新興豊竹座の人形を説明している。西とは竹本座のことであり、東は豊竹座をさしている。

下つて宝暦十二年のあたりでは人形頭の図を六つ描き、細工人・役名・頭に対する評判まで記している。

更に本作上演の翌年に刊行された竹豊故事の巻之中には「竹豊東西の流芝居繁昌之事」の章があつて、従来の黒幕に簾だけと云う背景、簡単な人形衣裳、などから次第に進歩して足付の人形が作られて来た事を述べ、又竹豊両座の舞台改善競争に就いて

「東は西に負まじ西は東に勝らんと互ひに励み出来、益々芝居繁栄し、浄瑠璃の作者は種々様々の趣向をあみ出し、道具建にも金銀を惜しまず、金襖にて舞台を輝かし、或は数奇屋懸りの粋成思ひ付に智恵袋の底を振ひ、人形の衣裳には縮緬緞子繻子金襴等にて美麗を尽し、詰人形の外は皆々足付と成、出遣ひの外は介錯足遣ひ立懸り歌舞伎役者の所作より増りて天晴見物事也。」

とある。これによると今日の舞台に可成り近い程度のものが此頃には出来上つていた様であり、技巧の極みの感がある。原作の天の網島が上演された頃に較べてその進歩の跡は誠に著しい。竹豊両座が新しい趣向をこらして観客の拍手にこたえていた有様がまじ〳〵とうかがえる次第である。

六

院本は次の二種を見ることができる。

○天理図書館蔵　十行本　七十枚

相当部厚いものであり、まして十行本の事だから随分の分量である。表紙は

双扇長柄松　豊竹越前少掾直伝
豊竹筑前少掾
菱屋治兵衛新板

とあり、裏表紙中側の奥附は

「右此本は太夫直伝の正本をくはしく板行致し候されば初心稽古のためこと〳〵くかながきにしてふししやうきり三味線ののりかたほどひやうし三重おくりのしな〳〵ひみつを残さずあらはし令板行者也

京寺町松原上ル西側　菱屋治兵衛板」

とある。山本版菊屋版の十行本の奥附と大体似通つたものであつて普通に言われる菱屋版の七行本の奥附とは大分異つている。

○京都大学図書館蔵　七行本　九十三枚

同じく部厚なものである。表紙は後のものらしく、奥附もついていない。

第一枚目

紙屋治兵衛
紀伊国屋小春　双扇長柄松上中下
上の巻　北野了幸寺の段　豊竹越前少掾

で始まる。九十三枚目の裏側には

宝暦五年乙亥七月七日　作者連名　並木　永輔
浅田　一鳥
難波　三蔵
三津　飲子
浪岡黒蔵主
豊竹　上野

と書かれている。

徳富芦花の「黒潮」について

橋本二三男

「黒潮」は明治三十五年一月二十六日から六月二十九日までの間、国民新聞に連載された。その執筆動機については、従来、よく芦花の社会主義思想と云うことと関連して考えられて来た。（例えば、寺園司氏「徳富芦花と社会主義」語文研究第三号、篠田太郎氏「徳富芦花論」、青野季吉氏「現代日本文学小説大系」第七巻解説）これは、芦花が「富士」の中で「『何故に余は小説を書くや』の中に『一頓挫せる維新の風潮に鞭たんと欲す』と書いたとき、熊次は日本の総建直しを社会主義によつて断行し、維新の精神を徹底させねばならぬと考えていたのであつた。「黒潮」に人道の流れを高調した下心もそれに外ならなかつた。」（「富士」第三巻第七章一）とあることから論じられたものであるが、この「何故に余は小説を書くや」は、「富士」に述べられている如く「黒潮」よりも前に書かれたものではなく、明治三十五年九月国民新聞に発表されたものであり、芦花が「富士」を執筆する際の資料の取違えか時期の錯誤であることは明らかである。私は、ここでは、「黒潮」の構成とその中絶について考察しながら、その一端に触れてみたい。

芦花は、「黒潮」までに代表作である「自然と人生」「不如帰」「思出の記」などを出しているのであるが、それらで得た「光明小説作家」「家庭小説作家」と言う位置づけに満足出来ず、いつか「男らしい小説」を書きたいと考えていたようである。明治三十四年五月十六日の角田勤一郎氏宛の書簡の中で、「此次は少し柄になき政治小説の様なものをやつてみやふとも思居申候……」とあり、それを政治小説に求めたことが分る。このような時に「見たもの、聞いたものしか書けない」芦花が、この時から二年前に兄蘇峰から聞いたテーマを思い出したことは容易にうなづける。

兄は機嫌よく朝から色々と話込んだ末、斯様な小説を書いたらどうだと言ひ出した。明治政府に反感を持つて落魄して死んだ志士がある。其子が父の志をついで明治政府と闘ふ。追々時代が移り、子の眼界が開け光るものは光り、畢竟めでたし、めでたしに落着く。敵方に可憐な女性があれば面白いでせふ。（中略）それは面白いでせふ。モデルは直ぐ傍にある。（「富士」第三巻第六章一）

このテーマと、この時兄から聞いた当時の閣僚や貴族社会の事情を資料として政治小説を書こうとしたことが考えられる。然し、このテーマは、平民主義を唱え、藩閥政府に対抗しながらも、日清戦争が始まると我然帝国主義に妥協して行つた蘇峰自身の事を言つていることに留意しなければならない。従つて、これによつて描いて行くとすれば、主人公は兄蘇峰の面影をもつのは当然であろう。

「黒潮」の広告は三十四年十月二十四日から四・五日置きに出され、三十五年一月一日の新聞には「黒潮の解」が発表されている。これには、

（前略）黒潮島も轟に奔注し来れり。（中略）海流を堰かんとする者、明盲酔醒組むづほぐれつ混戦すれば敵か味方か、勝か敗けか眩じたる眼に見分け難く、聾せる耳に聴き分け難し。（中略）老翁莞爾として余を顧みて曰く、「（中略）此に順ふ者は生き、逆ふ者は亡ぶ。汝が見る所を汝が国人に告げよ。」（中略）醒むれば机上半時の夢なり。老翁の言に従ふて詳らかに夢中の所見を書かむとする。（下略）

とあつて、題名「黒潮」はこの海流を指し、また、国民新聞掲載による「黒潮」第一篇の㈠の一（これは単行本には削除された部分である。）によると、

上には畏くも藤家に千年の屈を忍び給ひし歴朝列聖の御鬱憤、下つてはまた関原以来、三百年の胸を摩りし薩長の鬱憤、其れが思ひがけなき十九世紀世界の大勢に尻押しされて、夥しいうねりを打つて刎ねかへつた維新革命。

とあることから、その海流は世界の思潮と共に徳川幕府が倒れ、明治維新となり欧化主義へと推し進んで行く流れを描こうとしたことが考えられる。このように考えてくると主人公の父、東三郎はこの「海流を堰かんとする者」であり、亡ぶ人と云うことになる。東三郎は、鹿鳴館を初めとする欧化主義の風潮に激しい反感を持ち、また藩閥政府に対して真向から対立するのであるが、それは、そのまま兄蘇峰の姿である。引用はしないが、その辺の事情は「蘇峰自伝」に明らかである。（「蘇峰自伝」第六章一〇、第七章一、第八章五、第一〇章一）この蘇峰の二面（藩閥政府への反抗と妥協）は、「黒潮」に於いて、政府に反感を持つ者として東三郎を設置し、反感が消えるところに主人公晋が用意されていたと言うことが出来る。東三郎を「亡ぶ」徳川派の武士としたのも、こうした意図からかも知れない。

然し、「黒潮」第一篇は結果として芦花が書きたいと思つた政治小説と言うよりも、社会小説的となり、また蘇峰が最も重点を置いたと思われる「時代が移り子の限界が開け反感が消ゆる」ところまでは、書かれず「明治政府に反感を持つて落魄して死んだ」までで中絶し、永久に未完に終つた。

次にこの原因を考えてみたい。芦花は「富士」の中で小説を書くのに「自分は一切の経綸結構を終へて着筆するかはりに、水到渠成の法をとつた。」（「富士」第三巻第八章一）と言つているのであるが、その水が到るには、まず書こうとする事柄が主観的に自分の感情と結びつくことが必要であつた。事実芦花は一旦水が到ると夢中で筆を執つた作家である。小説では「不如帰」「思出の記」などがそれに当る。然し、「黒潮」の場合は客観的な立場から明治維新後の政治の潮流を描こうとしたのであり、芦花には水の到るのは困難な題材であつたと思われる。

明治三十四年十月頃から取りかかりながら新聞に掲載し始める、三十五年一月二十六日までの煩悶がそれを物語つている。こうした中にあつて書きやすい兄のテーマにより、また一度自分が「自然と人生」の「写生帳」の中に収めた「可憐児」を拡大して、「黒潮」の中での喜多川家の物語としたのも容易に理解出来ることである。

芦花の婦人とか、貧民など弱い者に対する同情は早くから筆にして来た問題であり、愛用のモティーフであるが、こうした芦花が腐敗道徳を描いた「黒潮」に於いて更に強調するのは必然であつたと思われる。私はこのことを「黒潮」を考える上で重視したいのである。兄のテーマによれば、反感が正当だてられて消える様に書かれればよかつたのであるが、東三郎は芦花がその精神を賛美して止まない武士であり、喜多川家の悲劇は早く筆にして来た問題である。（芦花は、非常に武士とか軍人が好きであり、武士道に執着していた。「新春」の「春信」㈣）従つて最初の兄のヒントによる構想がいかなるものであれ、ここに至つて芦花の道義感が発揮された。「黒潮」は政治と対決する東三郎の話と華族社会の腐敗による喜多川家の悲劇との二本の線から成立しているのであるが、この上にたつて強調されているものは、兄が意図した政治的反感よりも芦花の本領である道義的批判である。「痩せても枯れても東は武士ですぞ」と叫ばせて妥協させず、道子には父に対する敵対意識を持たせて周囲の言葉に従わず尼になると言う徹底した反抗を示させているが、このあたり、芦花の武士的正義感が発揮された部分であり、「水到」つた部分と云えよう。また、東三郎は政府に対して「牛の喘ぎを見て民の疾苦を察する心」を要求し、「政府は人民と釣合つて行かねばならぬ」（「黒潮」第七章十）と主張するのであるが、この主張は「黒潮」第一篇を終つた直後の短文「睡余録」の「牛の怒り」や「疑問」に於いて繰返されて居り、いかに芦花の考えが東三郎の上に移されているかも知ることが出来る。この様に芦花は漠然とした「政治小説」への憧憬から兄のヒントに従つて書き始めたのであるが進むにつれ、芦花の道義感が発揮され東三郎の反感は「晋」の時代になつて「消ゆる」ように書かれることが不可能な程に強調され、このため兄のヒントによる想定は全く覆えされ、それと同時に筋の展開は一層混沌となり、「一年にも渡る」と言う予告をもつて始められながら五ヵ月間で停滞してしまう結果となつている。書きながら幾度も筆が止り、全く嫌になつたと言つているのも先に述べた「黒潮」が、芦花には不向きな客観性を必要としたと言うことの他に、この中途から小説の筋が変化してしまつたことにも原因があろう。ところが、ここで注意したいのは芦花が民友社を去つて明治三十六年二月に「黒潮」第一篇を単行本として自費出版した際には、その包紙表面に次のように記されている事である。

「黒潮」の我岸を洗ふ如く人道の流れをして我邦を洗はしめよ。羅馬は一日にして成らず。我が日本の前途は遠し夫れ国民の成長は必ずや国民の解脱に伴はざる可からず。小説黒潮は今や渾ての方面に解脱なさむとして苦悶せる我日本を主人公として聊其消息を伝へ其前途の命運を描かむと試みたるものなり、全部六巻より成る。今第一篇を発刊す。（全集第七巻三二三頁）

ここでいうところの黒潮は兄のテーマや「黒潮の解」から受ける意味とは全く異なり、反感が消えるテーマとは反対に日本の命運を描くとなつている。

「黒潮」第一篇を自費出版する前の三十五年九月六日に国民新聞に掲載した「汽車の雑感」の中に於いて「黒潮」の漲る如き　社会主義の勃興を隻手をもて遏めんとするは誰ぞや」とあり、更に同じ九月の「何故に余は小説を書くや」の中でも、「人類の一員として毫里たりとも四海一家の大理想に此世界を近づけしめ」と述べ、また、十二月民友社を去る時、兄に対して「これから書くものはどうせ社会主義に傾くのですから」と言つていることなどから、明らかに「黒潮」は社会主義思潮として認識されて居り、黒潮続篇の「命運」は社会主義の方向に展開させようとしたことが考えられる。先に東三郎が亡び行く者として書き始められた証拠の一つとして引用した、新聞による第一篇㈠の一の部分は、この単行本に於いては削除され㈠の二から始まつていることも、この意味に於いてうなづけるのである。この急激な社会主義への傾倒は、「黒潮」を新聞に連載し終つた直後の七月一日に出た、矢野竜渓の「新社会」から強く影響を受けたことによることが「富士」によつて知ることが出来るが、芦花の社会主義とは明確に把握されたものではなかつた。然し、それはあくまでも「自家の社会主義」ではあつたが、一応、社会主義を執り「黒潮」の続篇をその方向に発展させることによつて、その停滞した「黒潮」の活路を見出したと言うことが出来る。

「黒潮」の第二篇は明治三十八年十二月末、木下尚江の雑誌「新紀元」に掲載されたが、唯、一回のみで終つている。この後、大正二年六月に「十年」と言う小説が国民新聞に十一回のみ連載されて中絶している。

（これを「黒潮」の続篇とする向もあるが、私には、これと関係のない別個の作品と見てよいように思われる。芦花自身も大正十三年の「黒潮」の広告文で「日露戦争前に著者は此小説を書いた。日露戦争終るやがて一度大正二年の夏に尚一度著者は、其続稿若しくは准続稿を書きかけてやめた。」と書いている。この「准続稿がそれに当るわけであるが、この頃芦花と交際のあつた松下芳氏が次のような事を聞いたと述べている。

「国民新聞に余儀ない事情で小説を書くことになりました。（中略）小説は「十年」と題し、日露戦争から明治天皇の崩御の時までを書く、つまり、歴史小説です」（「検討と追想」四六頁）。それに全く時代も、人物も違つた「十年」がどのように「黒潮」と結びつくであろうか。「黒潮」は、はじめ蘇峰のヒントによつて、ある程度その面影を持つているのであるが「十年」も兄との関係を描こうとしたことがうかがわれ（前田河広一郎氏「芦花伝」五六〇頁の引用による）、その点に於いて、芦花は精神的に続篇と考えたのではなかろうか。）

このように、続篇が書けなかつた原因については大きく言つて、芦花の社会主義思想の貧弱さと言うことと、主観的、感傷的な文学観の二つが言えると思う。芦花がどれ程に社会主義思想を認識していたかを見ると、その時代の事情を考慮に入れても随分疑わしいものである。明治三十六年二月に自費出版した「黒潮」の巻頭言「蘇峰家兄」の中で、自分が民友社を去るのは民友社の帝国主義と相入

れざる自分の社会主義思想のためである、と言う風に書かれているのは芦花の内面的真実には触れられて居らず、表面的な事実だけに過ぎない。それには芦花が、民友社の中で常に兄の支配下にあつたことへの強い抵抗や、一生乗り越えることの出来なかつた、兇暴な嫉妬妄想が原因していると思われる。これらの感情が積み重なつて、いつか兄と全く離れて独立したいと考えていた。そのきつかけを作つたのが明治三十五年十二月に新聞に載せた「霜枯日記」の中で、桂内閣の山本海相がシーメンス会社からコムミッションを受けたことを批判した語句を無断で削除されたことであつた。その時、後に「黒潮」の巻頭言となつた「告別の辞」を持つて兄を訪れた様子が「富士」には次のように記されている。

「何か新聞の方に間違ひがあつたさふだが」と彼は言ひかけた。

「切つていただきませふ。所詮見込がありません。これから書くものはどうせ社会主義に傾くのですから——」

「社会主義でも何んでも構はん。Indecent でさへなければ」

「然しどうせ駄目です」

このような会話が二人の間に取りかわされたのであるが、この兄の言葉に対して「どうせ駄目です」と強引に押切る必要はないであろう。芦花が本意としたところは、やはり、思想的と言うよりも、感情的な対立があつたからであると思われる。「富士」によると、

早稲田派の文士G君は（中略）社会主義を唱ふるなら「その成案を示せ」と紙上で詰め寄せた。（中略）熊次には社会主義の成案などは頭からありやう筈がなかつた。彼の社会主義は理論でなく実感であつた。

また

英文社会主義叢書を両手に抱く程買ひ込んだ。然し彼はそれを読むでもなく紙も切らずに了ふた。理論のこちたきを厭ふばかりでなく、彼は文芸に盛つた社会主義にも眼を曝さなかつた。

このような貧弱な社会主義思想は芦花の武士的精神の興奮によつて覆えされる結果となつてしまう。これは日露戦争の時に明確な形で現われて来る。「兄に楯つく弟は露西亜を撃つ日本を是とせぬ訳には往かぬ。全く熊次は文芸のロシヤを愛した。然し嵩にかかる其の傲慢を憎み、無神経な其態度を憎んだ。彼はロシヤが憎かつた」と言つて、全く自分の感情で割切り、平民新聞の非戦論号にも「吾儘なる子供は其の手を引握つて一睨の要あるを認むる」と答えている。これは日露戦争終結後に起つた心的革命に於いて反省しているが、その心的革命も表面的には変化があつたが、精神的にはどれ程改革されたかは疑問である。徹底した自己批判がなされたのではなく、従つて、彼の妻に対する自白も告白小説も自己肯定の上に立つた、唯事実を忠実に告白したに過ぎないと言うことは、その後の作品に於いても明確に現われている通りである。

芦花が「黒潮」続篇の社会主義的発展に於いて煩悶し、中絶せざるを得なかつた思想の貧弱さは既に第一篇に於いて見られる。東三郎は、芦花が好んだ点ではあるが、古い一面を持つている。藤沢伯の支配する役割も、機構も把握していないし、その批判も政策的と言うよりは道徳的な面に強く現われている。続篇に於いて期待される、昔の地盤も浅薄なものであり、第一回続篇をどのように展開させようとしたのか全く見当がつかない。

「黒潮」が中絶したもう一つの原因として、芦花の文学観をながめてみよう。これは「何故に余は小説を書くや」の中に最も明確に表現されている。

「小説家の第一義は視るにあり、行ひて見、帰り来つて所見を報告す。単純なる報告可なり。自家の意見を附すも亦妨げず。要は見徹せりや。描いて描き徹せりや。唯是のみ。」

「唯忠実に自家と自家の所見を発揮せよ。忌憚ある勿れ。柱ぐる勿れ。撃て。笑へ。怒れ。哭せよ。汝の涙は人を慰せん。汝の怒は人を醒まさん。汝の笑は人を恥ぢしめん。」

これは、「黒潮」「第一篇の連載を終つた年の九月に発表されたものであるが、「日本の命運」を描こうとしたその創作的方法と反して写実的であると共に主観的・感傷的なものとなつている。この主観的小説手法は特に独創力を必要とする「黒潮」に於いて、当然厚い壁に直面せざるを得ない。「不如帰」にしろ「思出の記」にしろ、見聞きした事を忠実に描いてきたのであるが、「黒潮」にあつては、自分の感傷性に「鞭」つて男らしい政治小説を書いて見たいと言うものであつただけに、書き始める時から筆が進まなかった。そこで兄のヒントに従つて、また自分の見聞を断片的に取り上げたけれども、どうしてもその範囲を出なければならないようになつて「空疎な力ぬけた感じに筆が動かなく」なり、晋と道子が新しい活動を起さなければならないところまできて逃れる思いで第一篇を終るのである。「十年」にしても「歴史小説を書く」と云い、また兄との関係を描くと言つても結局、実際書かれたものは、道徳的腐敗が生んだ「あわれ」に感動したことが動機となっている。彼の初めの「政治小説」への憧憬にも拘ず「黒潮」に現われたものは政策的なものよりも、道義的主張が主をなしているのをみても、いかに芦花が作品に取り上げた問題と主観的な結びつきを必要としたかを知ることが出来る。そして、そのように結びつくことによつて彼の筆力は政府の道義的腐敗と喜多川家の悲劇に集中され、兄のヒントによる構想への展開は不可能な程に高められている。然し、このところから「社会主義小説」へ展開させるためには、当然、客観性と独創力が要求せられて来る。芦花の煩悶はここにあつた。従つて、「黒潮」が結局未完成に終つたことは、彼が民友社を去つたからでもなく、また心的革命が直接原因したからでもない。その社会主義的展開に於いては既に彼の思想自体に一つの限界をもつものであり、その方法にあつては、主観的小説手法の客観的創作に於ける挫折であつた。

以上のように「黒潮」は社会主義の体制を持つことが出来なかつたのであるが、そこに現われたものは「政治的反感」ではなく、その方向に進めずにおれなかつたところの芦花の潔癖感であり、腐敗社会に対する非妥協の態度である。然し、芦花はここから、いかに闘つて行こうとしたのか、そこまでは追求せずして中絶した。それは彼自身の中に、それらの問題がまだ明確な形では把握されなかつたからである。芦花は、唯そうした腐敗と悲劇が現実に起るその事態そのものに、これではいけないと言う「実感」としての反撥を東三郎や喜多川母娘を通して叫んだのである。その追求の態度は表面化した社会悪にのみ対立して、キリスト者らしき（芦花は真のキリスト者ではなかつたが）人間性への深い批判の目は感じとれない。

「黒潮」は連載中「不如帰」や「思出の記」程にも一般読者から反響がなかつたが、自費出版の際わずか二ヵ月の間に七千部も売り尽した事は小説としての評判よりも、主として巻頭言である「蘇峰家兄」の文章が、その名文と共に一大センセーションを引き起したからであり、自分の信念を曲げず東三郎の如き非妥協の態度を実際行動に移す人として賛えられたからに他ならない。

だが、「黒潮」に現われた非妥協の精神が、当時キリスト教社会主義者として明確な態度をとり、また兆し始めた日露戦争の動きに対決しようとしていた木下尚江に受け継がれて行つた。木下尚江はこの頃の模様を次の様に語つている。

（前略）ヤボ新聞で講談ばかり載せていた。僕は小説を載せたいと思つたが、書く人がない。尾崎紅葉とか、泉鏡花とかさういふ人が居たが、僕は耶蘇教だつたのであゝいふ毛色の人は嫌ひであつた。耶蘇教の精神のあらわれたものが欲しかつた。そこへ「黒潮」が来たのである。僕はそれを読んで、これだと思つた。（徳富芦花「検討と追想」）

「黒潮」第一篇に於いては、晋も道子もキリスト教思想を持つものではないし、続篇に於いてもそれへの展開は稀薄と言つてよい。ここで尚江が「これだと思つた」のは、プロテスタント的倫理性にも通じる道徳的腐敗への反抗とその非妥協の精神にあつたと云えよう。

私は「黒潮」は、「明治の人民的、革命的文学の最大の達成の一つ」（小田切秀雄氏編「講座日本近代文学Ⅱ」第七章6）となる前に挫折したが、社会主義小説への先駆となり得たことは高く評価されていいと思う。

――完――